

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2014年11月 NO.182



[もくじ]

- 2～3 土佐塾校 OB・OG 展 TSJKism について…葛目結
- 4～5 劇場のある町、演劇のある暮らし…藤岡武洋
- 6～7 高知出版学術賞その後⑥「方言コスプレ」研究のその後 — 「龍馬語」からドラマ方言研究へ— 田中ゆかり
- 8～9 限界集落で未来を描く…小松圭子
- 10～11 言葉の現場から 48 褒姒の笑いのなぞ③…広井護
- 12～13 高知市文化振興事業団 9月～10月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

土佐塾校OB・OG展 TSJKism

葛目 結

土佐塾校OB・OG展

土佐塾中等高等学校が創立されて二十八年が経ちます。その中で、社会に出てからも、芸術活動を行っている卒業生が相当数います。その卒業生を中心に、初めての試みですが、「土佐塾校OB・OG展TSJKism」として二〇一四年十二月に展覧会・演奏会を高知で開催させて頂くことになりました。

今回、この「TSJKism」を開催しようと思ったのは、卒業生の芸術家・アーティスト・表現者たちの輪を形成し、交流を深め、互いに芸術活動を応援する機会を設けるためです。創作活動を行っていく上で、周りからの励まし、支援は大きな支えとなります。そのような支援の輪になるような活動を作っていきたいと思います。

土佐塾中等高等学校

土佐塾中等高等学校の教育理念である「智徳美体」。

現代社会を生きるためには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の「智・徳・体」をバランス良く育てることが大切だと言われています。土佐塾校にはその三つの他に「美」が含まれています。美しいと感じる感性も人間形成の上で必要なものだと思います。

在学中は毎日この言葉を見ながら山の上で過ごした気がします。この理念の通り、土佐塾校は文化系の活動が盛んです。今回のこの展覧会でも、三十二期の三十三名が参加します。これは、コンスタントに美を志す学生が出ていくということだと思います。さらに、サポーターでなく、出品者として参加する教員もいます。中学

校長も出品者として参加します。

進学校のイメージのある土佐塾校ですが、改めて、文化活動の受け皿が広い学校だと感じました。

制作について

私は六年間土佐塾校でのびのびと学び、大学では教育学部の美術コースへ進みました。大学卒業後は、アクリル絵の具を使用し、人物をモチーフに制作しています。制作は私にとって、自己表現であり、趣味であり、ストレス解消法です。

制作する上で大切にしていることは、「楽しむこと」です。絵を描くことが好きなので、その気持ちをモチベーションにして制作し続けたいと思っています。

今回の展覧会では、プロとして活躍しているデザイナーや、ピアニスト、画家などが多数参加しま

見がありました。

「TSJKism」を通じて

今回の展覧会のために、たくさんのご協力を頂きました。土佐塾校校友会、保護者の方々、土佐塾校の方々など。

皆様のご協力があるからこそ、準備は進んでおります。出品者に制作だけに集中してもらいたい、という実行委員の想いも叶いました。

在学中には、このような展覧会を企画し、実行委員を務めるとは思ってもいませんでした。当時は、話すこともなかった先輩方、後輩、同級生のお姉さんや弟さんなど、このような形で関わることになり、私自身も驚いています。絵を描き続けていくことに、疑問を感じることもありますが、このような経験や、たくさんのお会いを与えてくれて、意義があったのだと思いました。

プロ、現役で活躍している卒業生を見る良い機会になり、土佐塾校在校生や、土佐塾校に進学を考えている学生にとっても、有意義なものにしたいと思っています。

この展覧会が参加者の今後の活動にも刺激を与え、県内全体の芸



様々です。普段は芸術と異なる分野で活躍している卒業生も、この日のために制作し、参加します。様々な業界で活躍している卒業生を見て、私にも何かできることはないだろうか、と考えていました。そんな時、在学中お世話になった美術講師の西悟先生からアドバイスを頂き、今回の展覧会を企画しました。

昨年の秋頃から準備を始め、西悟先生や、高知在住の作家の呼びかけなどにより、実行委員会を作りました。およそ一年経ち、たくさんOB・OGとお会いしました。在学中には話すことも無く、関わることも無かった方々ばかりです。様々な業界で活躍しており、各々の強みを生かして作業していきます。芸術とは無関係の業種の方も、サポーターとして活動しています。

グループ展について

私は大学以来、今までに五、六度グループ展に参加しました。その中でも今回の展覧会是最も準備期間が長いです。

中学・高校の卒業生が集まり、展覧会を開催するという試みは、高知県内では珍しいことです。そのため、全てゼロから作成することになり、実行委員、出品者を探りながら準備を進めました。絵画、デザインなどに限らず、書道、音楽など、ジャンルの幅広い展覧会、発表会です。私自身は、絵画の展覧会の経験しかなく、経験豊富な先輩方、先生方に勉強させて頂きつつ、準備を進めています。これは私にとって素晴らしい経験になっていると思います。

この夏に、一つのグループ展に参加しました。これは出品者としての参加であり、実行委員ではありませんでした。「TSJKism」では、実行委員として参加者と向き合っていますが、そのグループ展では一出品者として、実行委員の働きを見ていました。その中で、「TSJKism」についても客観視でき、気をつける点、参考にすべき点などたくさんさんの発

す。そのようなメンバーの中、実行委員代表という立場で参加するのは大変なことですが、期待や楽しみの方が大きいです。趣味で制作をし続けている参加者もいれば、プロとして制作、発表する参加者もいます。どのような形でも、現在も芸術を志しています。その姿を是非ご覧下さい。



実行委員として

現在、芸術活動を継続して行っている卒業生の中で、高知県在住のメンバーを中心に準備を進めています。絵画やデザイン、立体服飾、建築、音楽などジャンルも

術の底上げになればと思います。実行委員一同力を尽くしますので、皆さんぜひお越し下さい。

土佐塾校OB・OG展 TSJKism

- 展覧会
 - 日時：平成26年12月9日(火)～14日(日)
 - 9：00～17：00
 - (最終日は16：00まで)
 - 会場：高知県立美術館県民ギャラリー
 - 入場料：無料
- ホール公演 (名曲コンサート)
 - 日時：平成26年12月13日(土)
 - 18：30開演
 - 会場：高知県立美術館ホール
 - 入場料：前売1,000円 当日1,500円



くずめ ゆい

一九八七年 高知市生まれ
土佐塾高等学校十六期卒業生、
高知大学教育学部生涯教育課程
卒業。

劇場のなる目、演劇のなる目

藤岡 武洋

高知市南金田にアートゾーン薬工倉庫が誕生して、もう三年がたちます。その一翼を担う多目的ホール蛸蔵は、高知で演劇、自主上映、音楽、出版などを手がけるメンバーが設立した「NPO蛸蔵」によって運営されています。

というのも、これらの団体が共有する課題として、日常的かつ安定的に使える「発表の場」や「活動の場」がないということがありました。それぞれイベントを企画するたびに場所の確保や設備の調整に時間を割かれ、また日常的な機材等の保管先で苦勞する現状をどうにかしたいという思いがあったからです。

また過疎・高齢化の進む高知では、行政が文化に投資するための余裕を持ち合わせていないと考え、

創造的な劇場とは

創造的とは何かと問われても、正直どういふ事か迷います。考えてみれば日本の劇場や公共ホールはまだ貸館というスタイルを多くとっています。つまり演劇のために建てられたものではないのがほとんどです。講演会も音楽会もやる多目的ホールと呼ばれるもので、現在の蛸蔵も同様です。様々なプログラムに対応できるフラットなスペースではありますが、それゆえに地域の住民が外から見たとき、何をしているのかわからない場所ということになりかねません。

これでは自分たちが一生懸命やっている活動が、周辺地域とは完全に切り離される事態になってしまいます。この場所で活動し、その成果をもって地域に貢献するという目的を達成できません。

それを回避するためにも、高度な創造機能をもつ劇場としての仕組みを取り入れる必要があると思います。劇場という場を文化の拠点として、地域の人々と創り手の

超越ながら蛸蔵はその大きな「穴」を埋めるべく、ハード・ソフトの両面から広く高知市、高知県、果ては四国までに広がる文化活動に協力し、そのことを通じて高知県全体の文化活動のレベルアップを図ろうとしています。

戦後間もなく建てられた土佐漆喰の蛸蔵をリノベーションし、風格のある都市景観を拠点としたこの取り組みは県外から多くの関心を集めています。この場所での活動を通して、ローカルであつても高い質を持った文化の担い手を育てていくことが高知に住む私たちの使命だと日々奮闘しています。

夢はあれども経営は……

しかし経営は困難を極めていますが、行政が文化に投資するための余裕を持ち合わせていないと考え、

人々が出会い、相互に影響を与えながら豊かな舞台芸術が生み出される土壌をこの南金田につくっていく。発表や鑑賞はもちろん大切ですが、同時に今以上に創造性を高める努力を蛸蔵がしなければいけません。ですからアートマネージメントに関するワークショップや、地域コミュニティに必要とされる舞台芸術のためのあらゆる研修・講座などを積極的に実施し、幅広く市民のアーツ・リテラシーの向上に寄与するプログラムの展開をしていかななくてはいいけないと考えます。劇場とはこういうものだという固定観念を排し、何か面白そうだと思うことに関わっていくことで、劇場そのものの価値を再発見再認識することができるのではないのでしょうか。「こうした方がより面白くなるからやってみよう」「今回は失敗したな」といった試行錯誤から出発し、劇場を創造の実験場にしたいと思っています。

シアターTACOGURAを設立

今年の夏にシアターTACOG

す。要因はたくさんありますが、主に民間のホールを運営するには自分たちの計画が甘かったこと、蛸蔵の新しい魅力（コンテンツ）を開拓してこなかったこと、継続的に助成金を獲得できなかったことがあげられます。どうにかしたいと誰もが思い、考えてはいます。けれど有効な打開策はまだ打ち出せずにいます。「お金があれば、お金さえあれば」と念仏のように唱えても、当たり前ですがお金は沸いてはきません。

この問題は、決して明るい未来像を描けない「地方」で暮らし、地域文化を支える活動、私で言えば演劇を一生続けていくには何が必要なかを考えるきっかけになりました。演劇を通じて地域社会に対してどう結びつき何をしてい

UR Aという団体を設立しました。これは蛸蔵専属の劇団です。既に演劇ネットワーク演会という組織が理事として参加していましたが、蛸蔵を運営していくための慢性的な人手不足をカバーし、また自分たちの創作活動のみならず、地域に溶け込んだ芸術活動を展開することが大きな目的です。南金田を活動拠点とし、継続を前提とした活動を展開することで、地域住民の支持を基盤として成立させたいわけです。また興行収入のほかに、助成金や寄付金を収入源として確保することも大切なミッションです。

日本は、文化も政治もすでに東京中心主義から脱し、自分たちの地域のことには自分たちで考えなければならぬ時代に突入しました。地域に必要なとされるのは自分で考え、創造する力を持つ人材（ソ

フト）です。私はシアターTACOGURAをその育成のためのインフラと考えています。なぜなら、演劇は人間理解あるいは人間関係の創造を軸にした表現活動だからです。この複雑な営みこそ、これからの地域コミュニティの成立に

くべきなのか。このことを今後は発見していかなくてはいいけませんし、そのためには創造的な集団を組織しなくてはいいけません。その目的を達成するために行動する場、つまり劇場は必要不可欠なものですし、蛸蔵がそうありたいと願っています。

高知にはすでに立派な公共劇場があるのではないかと、そういった意見もあると思います。「かるぽーと」を始め、確かに多くの劇場が高知の地域文化を盛り上げようとしてくれています。新たな創作の機会や場を提供してくれますし、日本全国のプロのアーティストと交流するためのハブにもなってくれています。

しかしそれらの力に頼り、依存してしまつた場合、地域の創作活動そのものが弱体化してしまつては意味がありません。私は地域文化の創り手として、次代を担う人材の育成を提案し続けていかなければいいけないと思います。公共劇場は様々な体験を提供してくれませんが、それは即戦力を求めているわけで、私たち自身の活動のフォロワーまでしてくれるわけではない

大きく貢献できると信じています。

またこうした草の根的な活動を行うことが、行政の文化政策に対する意識を変えるのだとも思っています。私たちの小さな活動が地域の住民の生活に変化を与え、自分たちの力で何かを変えられるかもしれないという自信に結びつき、それが南金田を、ひいては街全体を誇りに思ってもらえるようになって初めて蛸蔵は社会に必要とされる存在になれる。そうならば、そのインフラとして、観ることと創ることの両面で芸術に触れることが可能な「劇場」という拠点が、やはり地域には必要という話になり、公共化という話もあるのだと（都合よく）考えています。

少しずつ実績を作っていくことで、県や市は地域貢献のために蛸蔵を支援すべきだ！という流れを作っていきたいです。

ふじおか たけひろ

一九七九年 高知市生まれ
シアターTACOGURA主宰。

高知出版学術賞その後⑤

「方言コスプレ」研究のその後 「龍馬語」からドラマ方言研究へ

田中 ゆかり

「方言コスプレ」の時代―ニセ関西弁から龍馬語まで―（岩波書店、二〇一一年）で、第二十二回高知出版学術賞を頂戴したのが二〇一一年度。早いもので、三年が経とうとしている。

受賞のご連絡を頂戴した際は、嬉しさがこみ上げてきたのと同時に、高知にゆかりのなかった自分の研究を選んでくださったこと、驚きでもあった。授賞式では、拙著タイトルが読み上げられると、笑いかみころしているかのようなムードが会場全体にさざ波のように広がった、と感じられたこと、も思い出深い。

第二十二回に同時受賞した方々をはじめとした歴代受賞者の顔ぶれはそうそうたるもので、受賞作品のほとんどがリアルな高知に根ざした研究で、そうでない場合は、高知出身あるいは在住の方の研究である。

それに対し、拙著とはいえば、創作物に現れる「龍馬語」、すなわちヴァーチャル土佐弁を通じて、「幕末方言ヒーローキャラ」としての「坂本龍馬」がどのように形成されてきたのか、ということを一例として取り上げたヴァーチャル方言研究である。

にもかかわらず、このようなヴァーチャル研究にまで目を配ってくださった選考委員会の胆の太さには、心から感謝している（表紙が村岡マサヒロさんの『きんこん土佐日記』であったことは選考に際して有利に働いたようにも思う。村岡さん、高知新聞社のみなさま、掲載のご許可、ありがとうございます！）



©風間綾乃

インとドラマの登場によって、「方言コスプレ」は、もはやほとんど説明不要になったのだ。

NHK連続テレビ小説は、一九六一年に放送を開始した最長寿のテレビドラマシリーズで、地方が舞台になることが多い。そのため、「方言ヒロイン」をまた輩出しており、そこで使われる方言の注目度も高い。

こういったドラマで使われるヴァーチャル方言に注目し、方言ドラマと方言ヒロインの形成過程とタイプ分類を試みたものが、金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編著『ドラマと方言の新しい関係―「カーネーション」から「八重の桜」、そして「あまちゃん」へ―』（笠間書院、二〇一四年）である。



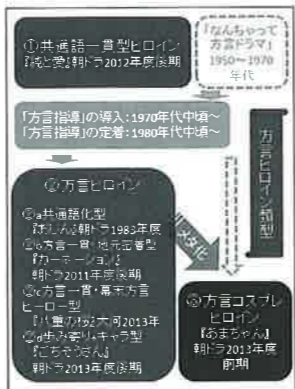
その前に、まず、拙著で述べた「ヴァーチャル方言」・「方言コスプレ」とは、どのようなことか簡単に説明したい。

「方言」とは本来、リアルな土地と結びついたリアルな生活のことばである。それに対して、ヴァーチャル方言とは、リアル方言がなんらかのレベルにおいて編集・加工された仮想のことばである。日本語社会で暮らす人びとの頭の中には、仮想の「○○方言」や、それと結びついたステレオタイプがある。「方言コスプレ」とは、そのようなヴァーチャル方言とステレオタイプを用いた、キャラ練り出し行動のことを指している。

もう少し具体的に説明すると、以下のようなことになる。

関西人でもないのに「なんでやねん」とツッコミ、高知人でもないのに「行くぜよ！」と男気キャラで気持ちを奮い立たせる。それから、「○○県人」ということをヨソモノにはわかりやすく、地元民同士ではその紐帯を明瞭化するために「素の方言」を編集・加工した「○○方言」で地元キャラを際立たせる――このような言語行動のことを「方言コスプレ」と呼んでみたわけである。

しい。「あまちゃん」の「方言コスプレヒロイン」は、これらの方言ヒロインが一通り出そろい、それらがメタ化されることによって、はじめて成立しうるヒロイン類型である。



いったんメタ化が意識化されるような感性が広く受容されるようになると、さらに新しいタイプの方言ドラマや新しい方言ヒロインが生まれてくる。

「龍馬語」と「龍馬キャラ」からスタートした創作物における登場人物のセリフとキャラクター造形をたどる旅は、わたしにとっては、まだ始まったばかりである。前著を事業団が見ていくくださるよう、これから先も見えていくくださる方がきつというだろう。高知とのお縁もこれを機会に何かしら続いていくのかも知れない。方と、いうわけで、開くべき「方

拙著刊行後は、さまざまなコメントを多方面より頂戴した。わかる、わかる！と好意的に受けとめてくださる方も多くいらしたが、逆に、生活のことばである方言を遊びに使うとは、とか、こんな言語行動は都会の若者限定の一時のお遊びに過ぎないといった拒否反応も少なくなかった。

しかし、二〇一三年度前期に放送されたNHK連続テレビ小説『あまちゃん』の登場によって、事態は大きく動いたのである。

『あまちゃん』のヒロイン・天野アキは、東京生まれ・東京育ちにもかかわらず、祖母の住む大好きな架空の街・北三陸市の方言を話す「ニセ方言ヒロイン」として造形された。また、同作品では、奥歯をガタガタいわすようなシーンでは「関西弁」、気分がアガルシーンでは「龍馬語」など、方言ステレオタイプを用いた「方言コスプレ」も多用された。これらは、朝ドラとしては初の挑戦的試みであったが、同ドラマから飛び出した「あまちゃん」方言の「じゃえじゃえ」が二〇一三年の流行語・新語大賞のひとつに選ばれたことから明らかのように、国民に広く受け入れられた。この「方言コスプレ」を具現化したかのようなヒロ

たなか ゆかり

一九六四年生まれ神奈川県生育
日本大学文理学部教授 博士(文学)

一九八七年早稲田大学第一文学部卒業後、約三年間、読売新聞社に勤務(記者職)。一九九六年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了。早稲田大学文学部助手、日本学術振興会特別研究員(PD)、静岡県立大学国際関係学部専任講師などを経て、二〇〇六年度から日本大学文理学部教授。専門は日本語学(方言・社会言語学)。主な著書に『「方言コスプレ」の時代―ニセ関西弁から龍馬語まで―』(二〇一一年、岩波書店) 第二十二回高知出版学術賞、『首都圏における言語動態の研究』(二〇一〇年、笠間書院)、『方言学入門』(共著、二〇一三年、三省堂)、『ドラマと方言の新しい関係―「カーネーション」から「八重の桜」、そして「あまちゃん」へ―』(二〇一四年、笠間書院)。

言コスプレ」の扉は、まだまだたぐさんありそうである。

限界集落で未来を描く

小松 圭子

愛媛の小さな漁村で生まれ育った。目の前の海で釣った魚や、段々畑で育てた野菜など「食」に恵まれた豊かな自然環境があった。「豊かさ」「幸せ」を実感できる故郷で、自分も子育てをしていきたいと願った。

けれど、地場産業である養殖業が急速に衰退し、職を求めて故郷を離れる人が増えていた。そして、学校を卒業すれば故郷を離れることが暗黙の了解となっていた。千年以上もの間、先人たちが苦労を重ねて繋いできたことを思うと、なぜ私の代で容易に離れなければならぬのか、と悔しかった。私にも、なにか一石を投じられないか、と大学時代には、全国各地のまちづくり先進地を訪れるようになった。故郷の可能性を見つけよ

うと必死だった。

故郷には段々畑があった。先人たちが築き上げてくれたこの畑が、その可能性を教えてくれた。国の景観法制定後、すぐに文化的景観として故郷の景色が選定された。再びむらづくりの灯が住民にも広がり始め、むらの活気が少し戻っていた。ただ、私は地域の暮らしを繋いでいくための産業を興すことはできず、地元の新聞記者となった。取材対象となりがちな地元での活動を続けることはできず、距離を置かざるを得なくなっていた。

仕事として、地域の暮らしを取材して伝えることに大きな遣り甲斐を感じていたが、自分自身が田舎暮らしをしたいという想いを諦めきれないでいた。そして、四

年前、高知県安芸市の山奥・畑山（はたやま）で、故郷以上に衰退し、**「限界集落」**と呼ばれるむらで暮らす夫と結婚し、移住してきた。大学時代に初めて訪れた畑山に、可能性を感じ、自分の生きる場所に決めたのだった。

安芸市街地から車で約四十分、県道の行き止まりにある畑山には、人口約五十人が暮らす。周辺には消滅した集落が幾つもあり、今は隣の有人集落とは約十五キロメートル離れている。陸の孤島でもある。

限界集落とは、人口の過半数が六十五歳以上を超えたことをいう。畑山では七十五歳以上は三十三人いるが、還暦前は十人しかいない。うち二人は我が家の子どもたちだ。保育所や小学校は随分と昔になく

なり、商店ももちろん無い。

畑山は、千年ほど前から人が暮らした歴史があり、江戸時代にも六百人以上、五十年ほど前には八百人近い人が暮らしを紡いできた集落だ。農林業を中心とした生業が廃れ、昭和の市町村合併後は急速に人口が流出していった。私が感じたように夫もまた「なぜ自分の好きな故郷を離れなければならないのか」と、自分で産業を興そうともがいてきていた。夫と私の夢は「農業の六次化をはかり、畑山ならではの新しい田舎型産業を築き、労働可能な人が二十人くらいは暮らせるむらを作る」こと。



自然豊かな畑山での暮らしを子どもたちに繋ぎたい

その家族がいれば、人口はもっと増え、賑わいもでる。千年続いた集落が静かに終わりを迎えるのではなく、次の世代も、また暮らしを紡いでいけるような仕組みを築きたい。その核になりうる宝が、畑山には出来上がりつつあると感じている。

平成元年、夫は高知県が開発した地鶏「土佐ジロー」に出会い、その想いを託すようになる。「畑山の自然を生かし、畑山ならではの美味しいものを作れば、きっと活路は拓ける」と信じて。元大工の腕を生かして鶏舎を何度も建て直し、ジローに合う飼育法の開発に十年近くを費やした。お金がなく、大工やトラック運転手としてアルバイトをして、ジローのご飯代や鶏舎の建設費を稼いだ。努力が実り、ジロー本来の旨みを十分に引き出せる飼育法にたどり着いた。肉の味は高評価を得るようになり、家族以外にも雇用できるようになっていった。

平成十七年には、安芸市の「畑山温泉の家(現はたやま憩の家)」の指定管理者として食堂と宿の運



畑山再興のための軸になりうる土佐ジロー雄若鳥のお肉

営も手掛けるようになった。土佐ジロー料理を全面に打ち出したところ、全国の鳥好きの人たちが畑山を訪れるようになった。引き受ける前は安芸市が閉鎖を検討していた宿だけれど、平成二十五年度には宿泊者が年間約七百四十人、食堂には約三千人が訪れている。玄關脇に張った日本地図は、北海道から沖縄まで、お客さんの住む場所に貼られたシールで彩られている。遠くは中国やヨーロッパ、アメリカから来た人もいた。

限界集落ながら、こうして訪れる人が増えるさまに、愛媛にいた私は可能性を感じていた。テレビや雑誌などで、夫や土佐ジローを見かける機会も増えていた。経営的に飛躍しそうに見えるのに、限界集落の抱える課題は山積している。全国各地には、窮地に追い込まれた地域が、キーマンの出現で大きく変貌していく事例がたくさんあった。私も夫とともに、畑山の再興を実現させたいという気持ちが強かった。

畑山に来て四年が経つ。田舎暮らしはのんびりとできそうだけれど、実際には慌ただしく日々が過ぎていく。携帯電話の電波がなく、急な仕事の依頼に対応しきれない。食堂の買い出しや子どもの保育所の送迎にも往復一時間半はかかる。食堂には来客数がゼロの平日もある。ならば、ゴールデンウィークには百人近い人が訪れる日もあるなど、バランスが悪い。街中では急な数時間のアパートを頼めるかもしれないが、畑山では難しい。高齢者が多いため、地元で雇える人が少なく、現在、養鶏と宿で五人を雇用しているが、四人は市街地から通ってきている。また、私たちの事業に賛同し、畑山で暮らしたいという希望者もいるが、畑山には空き家が皆無で、新居を建てるしかなかくハードルがかなり高い。唯

こまつ けいこ

一九八三年 愛媛県宇和島市生まれ

早稲田大学政治経済学部卒業後、愛媛新聞社へ就職。新聞記者として四年半勤務。二〇一〇年、結婚を機に高知県へ移住。有限会社はたやま夢楽の経営に携わる。

褒姒の笑いのなぞ③

「褒姒の笑い」(井上靖)の授業紹介を続けている。笑わない美女、褒姒の物語である。

背景にあるのは中国の古代史と伝説だ。褒姒が笑ったとき、世界(周の国)は滅んだのである。なぜ褒姒は笑ったのだろうか。それが授業の最終テーマである。だがこの問いに答えるには、まずなぜ褒姒が笑わなかったのかを解明しなければならぬ。

前号で分析したように、褒姒は、(a)「生身の人間」として描かれながら、同時に(b)「超自然的存在」としての暗示もされている。つまり二重の存在として描かれている。けれど、中学生にとってわかりやすいのは、「生身の人間」としての褒姒だろう。

思春期の中学生は「疎外感」に敏感だ。「お前は拾い子だ、拾い子だ」と言い聞かされて育てられる幼児の不安が、皮膚感覚でわかるところがある。なぜ褒姒は笑わなかったのか。

この問題を、「生身の人間、褒姒」に限定し、中学生目線で掘り下げてみたい。

褒姒が「笑わない娘」であったことは、生い立ちから語られている。

十五、六歳になると、褒姒の美貌は輝きだし、国内で誰一人知らぬ者はないほどになったが、どういふものか、褒姒は決して笑うことのない娘として成育していた。どんな可笑しいことがあっても笑わなかった。笑わないうことも亦、その美貌と共に国中に知られた。笑うことを忘れた娘をまん中にして、両親は言い争うことがあった。拾い子だ、褒姒から笑いと云って育てたことが、褒姒から笑いと云うものを取り上げてしまった原因であるに違いないとして、二人はその罪を互いになすり合った。(「褒姒の笑い」・新潮文庫「樓蘭」所収)

けれど」

P「子供…」

T「どうして？」

P「子供は、家庭がなければ生きていけない…」

T「じゃ、大人は？」

P「大人は、なんとか生きてはゆける…」

T「そうだよね。家庭の保護がないと幼い子供は生きてゆけない。幼児にとつては、家庭は『全世界』を意味するからね。」

その家庭の中で褒姒は、『自分が拾い子であり、両親の情けでいま生きていられるのだ』ということを生きていられるのだと、生い育って来た。幼い褒姒の身になって考えてください。褒姒にとつて、これはどういうことを意味するだろうか？褒姒は、この家で自分のことを、どういう存在だと感じていただろうか？

P「必要とされていない存在…」

P「居場所がない存在…」

T「そう。幼い褒姒は自分をそんなふうと感じたはずだ。両親にとつては、恩返しを期待できる『必要な存在』だったかもしれないけれど…褒姒は、この家庭の『招かれざる客』だったんだ」

とここで、映画の話を挿入する。黒人差別をテーマにした古い映画「招かれざる客」の紹介である。招

かれないうちのやっ来てしまった黒人青年が味わう孤独をリアルに描いた映画だ。この話を生徒たちの日常とリンクさせる。

T「たとえば、仲良しグループがアイドルの話題で盛り上がっているとき、テレビ見てなくて、自分だけの話題についてゆけないことってあるだろう。そんなときに感じるあのなんともいえない不安な気持ち。あれが『招かれざる客の不安』だ」

この例は思春期の中学生たちにとつてインパクトがあるようだ。顔色が変わる生徒もいる。多くの生徒が真剣な表情で身を乗り出してくる。実際に、三十年前から、生徒達のこのリアクションは変わっていない。

とここで三十年前にはこんな発言もあった。

P「褒姒は、自分のことを『お呼びでない』存在だと感じた…」

当時すでに死語に近かった植木等のギャグである。生徒は冗談で言ったのではなく、真面目な顔で言ったのである。

T「そうだね。幼い褒姒は、自分が何かとつてもなく場違いなところに迷いこんでしまったような不安を味わっただろう。こういう不安を何と云うか知ってる？」

P「…」

T「『疎外感』と言います。…思春

文学作品の中で、同じ内容が言葉を変えて反復されると、「強調」効果が生じる。「褒姒は決して笑うことのない娘として成育していた。」「どんな可笑しいことがあっても笑わなかった。」「笑わないことも亦…」「笑うことを忘れた娘…」と畳みかけてゆく反復表現が、褒姒の「笑わない」イメージを強烈に印象づける。

T「褒姒は『笑うことのない娘』だったと書かれているね。じゃ、泣くことはあったのかな？あるいは、怒ることは？」

P「泣くことも、怒ることもなかったと思う…」

T「どうして？」

P「笑わないってことは、なんか感情がないみたいだし…」

P「逆に、泣いたり、怒ったりするような人は、可笑しいことがあったら笑うんじゃないかな」

T「確かに褒姒には、感情がどこか麻痺しているようなイメージがあるね」

実際、「笑わない王妃」として生きる後年の褒姒の描写をたどると、褒姒は笑わなかっただけではなく、感情表現をしなかったらしいということも見えてくる。(前号、参照)

褒姒の顔は、能面のように無表情だったのである。

T「なぜ、褒姒は『決して笑うこと

期は疎外感に敏感になるときだ。この言葉、覚えておいてください。

では、疎外感の反対を何と云うだろう？みんなと一つになっているという感情」

P「『一体感』かな…」

T「その通り。アイドルの話題についてゆけなくて疎外感を感じるの、一体感を求めているのにそれを得られないからだ。」

幼い褒姒も同じだったと思う。褒姒も両親との、家庭との、世界との一体感を求めていたはずだ。ところが、お前は拾い子だ、拾い子だと言われ続けることで、求めた一体感

は強烈な疎外感に変わった。けれど、幼児にとつてはこのショックは大き過ぎる。まともに受けとめたら心がこわれてしまう。だから褒姒は逃げ道を求めた。

でも逃げ道はなかったんだ。お爺さんやお婆さんがいたり、兄弟姉妹がいたりすれば、誰かが褒姒を受け入れて、不安を癒やしてくれたかもしれない。でも褒姒の家は、『核家族』だった。しかも褒姒は一人っ子だった。…ただ褒姒には、一つだけ逃げ場所があった。それはどこだろう？

P「…」(答えられない)

T「ヒント。褒姒の外側には逃げ道はなかった」

P「…自分の心」

のない娘」として生育したんだろう？両親は、その原因をどう考えているの？」

P「拾い子だ、拾い子だと言って育てたことが褒姒から笑いと云うものを取り上げた原因であるに違いないとして…」ってあるから、『拾い子だ、拾い子だ』と言って育てたことが原因だと思ってる」

T「…二人はその罪を互いになすり合う」ってどういうこと？」

P「自分のせいじゃなくて、あなたのせいで褒姒が笑わなくなった。美人なのに、いい家に嫁に行けない。恩返しも期待できない。みんな、あなたのせいだ。…みたいな」

T「醜い争いだね。だけど、そういう言い争いが起こったってことは、拾い子だ、拾い子だと言って育てたことが、褒姒の心にショックを与えて笑いを奪ったのかもしれないという自覚が両親にもあったってことだ。そうやって育てた両親でさえ感じ取らずにいられたかったショック。これ、想像できるかな？」

幼い子供にとつて、家庭がどういふものかということを考えてみよう。家庭というものの重さは、子供にとつてと大人にとつてとどちらが大きいと思う？もちろん、どちらにとつても大切な、重いものではある

P「自分の内側」

P「心の奥底」

T「その通り。心理学でいう『無意識の世界』だね。それが褒姒の逃げ場所だった。褒姒は自分の感情を無意識の底へ抑圧し、心の扉をびしゃりと閉ざした。感情を麻痺させれば、傷つくこともなくなる。『ダイアモンドは傷つかない』(三石由紀子)っていうタイトルの小説がある。褒姒は、『笑わない女』になることにより、ダイアモンドのような傷つかないう心を手に入れたんだ」

自分の存在を世界から拒否された褒姒は、自分が世界を拒否することによってしか、自分の存在を守ることができなかった。そんな褒姒の心に感情が蘇るのは、『世界の滅亡』のときだ。…それについては、次号で述べてみたい。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学
科卒業後、私立土佐中高等学校
に勤務。国語の教師。

素展 Resources

九月五日から九月十四日まで、高知市文化プラザかるぼーと市民ギャラリーにおいて「素展 Resources」を開催しました。

この企画は、高知市内において障害者アートに取り組む「アートセンター音楽」と、障害のある方の就労支援事業を主に行う「NPOワークスみらい高知」が運営する「薬工ミュージアム」、そして高知市文化振興事業団の三者による実行委員会を組織し、全国で活動する作家の作品展示や、各施設の取り組みを紹介し、「わたしたちは何を大切に、どんなふうに住んでいくのか」について、さまざまな角度から考える展覧会となりました。出展団体は、工房地球村(宮城)、多夢多夢舎(宮城)、ハート&アート空間ピーアイ(宮城)、studio COCCA(神奈川)、たんぼの家アートセンターHANNA(奈良)、工房まる(福岡)、JOY倶楽部アトリエブラヴォ(福岡)、葦の家(福岡)、アートセンター音楽(高知)の九団体。それぞれの施設で活躍する作家による、平面や立体、ビデオアートの作品展示を行いました。会期中は展示のみならず、さまざまな関連イベントを開催しました。

動する「劇団くらっぶ」の代表、もりながまことさんと俳優さんによるもので、知的ハンデのある俳優さんで構成される同劇団に高知のメンバーが加わり、「会社をつくる」というテーマの元、即興的な演劇を作りました。

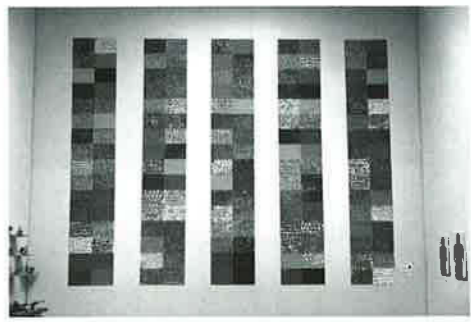
ふたつめはライブペイント「ぼく、やってみた! in素展」(九月十三・十四日)。こちらは、はりまや橋商店街を会場に、studio COCCAの作家、辻さんによる、お客さんといっしょに作品を制作するライブペイント企画でした。このライブペイントは二日にわたって開催され、二日目は高知街ラ・ラ・音楽祭と会場を同じくし、ライブペイントの参加者が音楽を楽しんだり、ラ・ラ・音楽祭の出演者がライブペイントに参加するといった、それぞれの参加者が交流する場面も見られました。

また、この企画はかるぼーと会場のほかに、薬工ミュージアムを会場に、「素展 meets 現代地方譚 HOW TO プリコラージューモノと対話すること」ものに語らせること「展」と題し、かるぼーと会場で開催した四人の作家の作品に加え、昨年度須崎市で開催された「現代地方譚アーティストインレジデンス須崎」参加の現代作家六人による成果作品を九月十三日から十一月三日まで展示し

ていました。この関連行事として「創造の先について考える」と題したシンポジウムを薬工ミュージアムに隣接する蛸蔵で開催しました(九月十四日)。

studio COCCAの関根幹司さん、画家の織田信生さん、アートセンター音楽の上田祐嗣さんによる、アートが社会にどう繋がっていくかを考え合うシンポジウムとなりました。

近年、障害者アートは少しずつ社会に広がっているように感じます。今回の展覧会は、作家の持つ強いエネルギーを観覧者に伝えるとともに、そのエネルギーをどのように社会に繋げていくのか、たとえばグッズ展開や、企業とのコラボレーションなど、多くの方が日常からアートの触れられるように、それぞれのアーティストがどういった視点を持ち、活動しているかを知る非常にいい機会でした。今回生まれた縁を活かし、今後も継続的な取り組みを続けていきたいと思えます。



〈入場者数・六百三名〉

9月~10月の事業から

高知市文化振興事業団

THE BEATLES CLASSICS

1966カルテットコンサート

二〇一四年九月十二日(金)高知市文化プラザかるぼーと大ホールで、クラシックのテクニックをベースに洋楽アーティストのカバーをする1966カルテットのコンサートを開催しました。

ビートルズ来日の年「1966」を冠にし、日本にビートルズを広めた男と言われる、元東芝音楽工業(後に東芝EMI)の高嶋弘之氏がプロデュース。その高嶋氏が開演に先立ち、ビートルズのデビューに関する裏話をプレトークというかたちで行いました。当初、開演時間までに終わる予定でしたが、話し出すと止まらない高嶋氏、開演時間を五分ほど過ぎてしまいました。

第一部では、誰もが知っている名曲「Hey Jude」「Yesterday」「Let It Be」等をクラシックにアレンジ。第二部では、マイケルジャクソンとクイーンの名曲も披露。ロックをクラシックに聞かせる技法は多くの方を引き付けました。ピアノの江頭さんは、「響きが良いね!」とホールの環境の良さを誉めてくださいました。弦楽の三人は全て暗譜で、お互い時々目を合わせ、笑いながら楽しく演奏している姿が印象的でした。



リーダー松浦さんのMCも好評で、「CDロビーで売ってます! サイン会もやりまーす!」と言うと、終演後、八十枚ものCDが売れました。ロビーでは高嶋氏保有のビートルズお宝グッズも披露。値段がつけられない貴重な品の数々に多くの人が集まり写真を撮っていました。終演後、ヴァイオリンの花井さんは「高知のお客さんは反応も良く温かかった。今日は、いい意味で全然緊張せずに楽しめた」と言っています。

チェロの林さんは、食べるの大好き。終演後に、かつおの塩たたき・青さのりの天ぷら等、高知の名物を堪能されました。

〈入場者数・三百二名〉

弧の会 日本舞踊公演

コノカイズム

特色の異なる様々な流派が存在する日本舞踊界で、流派の垣根を越えて集まった十一人の男性舞踊家集団「弧の会」。日本舞踊のすばらしさを一人でも多くの人に伝えたい想いで、一九九八年に結成し、全国各地で公演を行っています。

そして今回、二〇一四年十月四日(土)高知市文化プラザかるぼーと大ホールで高知公演を開催しました。前日の十月三日(金)には、四歳児から中学二年生の子ども達十二名に、日本舞踊の楽しさを知ってもらおうとワークショップを開催。弧の会独自のジャンプを交えた踊りでは、日頃、日本舞踊を習っている女の子が驚きの表情を見せるシーンも。きちんとした礼儀の中にも、ボケて笑いを誘う弧の会メンバー、和気あいあいとした雰囲気の中、「さくらさくら」を皆で踊りました。

本公演は、よさこい節を流したり、地元の酒造メーカー土佐鶴の酒樽を舞台セットとして使用したりと、高知ならではの演目を披露。代表作「御柱祭」では、動きの速さに加え、側転やジャンプを繰り返す圧巻の演技! 日本舞踊とは思えないほどの所作は、期待どおり未だかつてみたことのないステージでした。

今回も、物販として用意したオリジナル手拭いがほぼ完売する勢い。来場者の満足度の高さを物語っていました。



〈入場者数・六百名〉



ミュージカル「クリスマス・キャロル」

不朽の名作である「クリスマス・キャロル」を劇団スイセイ・ミュージカルが今までとは一味違うミュージカルとしてお届けします。大人から子どもまで楽しめるミュージカルファンタジー！どうぞお楽しみください！

出演：草刈正雄、川島なお美、吉田要士 他

- 日時 2014年11月21日(金) 18:00開場 18:30開演
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと大ホール
- 料金 S席 前売り 6,000円 当日 6,500円
A席 前売り 5,000円 当日 5,500円
- お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

風俗

六斎日

の連続休みは無理だ。そこで週の半ばに一日休みをとって、週休二日と併せて、連続してはいたないが週休三日にしようと思った。だが、周囲が仕事をしているのに、自分だけウィークデイに定期的に休みをとるのはなかなか難しい。なんだかんだ用ができて、結局週休二日制に逆戻りしてしまった。

「古来稀なり」という古稀を目の前に、いろいろやり残したことも多く、なんとか自由な時間をもう少しとれないものかと考えるようになる。ずいぶん前のことになるが、いまの週休二日制の休みを週休三日にしたら、さぞ有意義で自由時間もできるのではと考え実行に移したことがある。

出勤し、一時間の昼休みを二時間にし、夕方になるべく早く終わるようにする。つまり、一日の仕事時間のなかで、細切れの時間を作ろうという魂胆である。一日三時間ほど、五日で正味十五時間になる。これなら、周囲ともスケジュールを合わせれば、なんとかなるのではないかと。確かになんとかなることはなかった。しかし、五日をかけて十五回とあまりに細切れなので、まとまったことが出来るわけでもなく、当然のことだが、週一日分休みをとっているイメージがまったく湧かない。なんとなく、うらたると稼いだ時間が過ぎていってしまう。そもそも怠け者の自分は、結局はなんだかんだ中途半端にして死んでいくのだらう、と思う。仏教では月に六日間、身を慎んで過ごす日を六斎日というようだが、雑務を離れ、月八日も休めればよしと思わなければならないのか

(森)

南河内万歳一座

ジャンゴ

作・演出 内藤裕敬



関西小劇場界屈指の劇団、南河内万歳一座による最新作！

時にはプロレス技も飛び出すダイナミックな演出と、劇団座長・内藤裕敬の描く、現代社会を俯瞰しながらも、観るものの心に何かを刻むストーリーは必見！

- 日時 2014年12月20日(土) 13:30開場 14:00開演
2014年12月21日(日) 13:30開場 14:00開演
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
- 料金 一般：前売り 3,000円 当日 3,500円
学生・シニア：前売り 2,800円 当日 3,300円
- お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「夕暮れの街」

片岡 瑳那

秋から冬に変わるころの夕焼けをイメージし制作しました。もうすぐ訪れる冬の雰囲気を出すために、背景に少し雪をちりばめてみました。

(かたおか さな / 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



高知を撮る

名野川磐門神楽

大西 隆俊

第30回写真コンテスト入賞作品

(平成25年12月 仁淀川町宗津)

先頃、白内障の手術をして目が良く見えるようになり読書も大分戻ってきたが、加齢とともに読書量はずいぶん減ってきている。致し方ないことかもしれない。残された時間をどう充実したものにするか。

灯火親しむ



風俗歳時記

のなかで、読みたいという本が本当に少ない。新刊書が書店に置かれる期間も短すぎる。手取り早くインターネットで本を購入する機会が多くなっていくが、地元の本屋さんにもこれに負けないシステムを考えないと、本当に書店が要らなくなるかもしれない。

はじめにこれを言うと、身も蓋もなくなるので今云うのだが、本を一冊も読まなくても人生は全うできる。それで無教養な人生とは限らない。知識を蓄え、教養を増やし、コミュニケーションを豊かにする方法はいくらでもある。メディアの多様化がそれを助けている。読書離れも理

(森)

JAZZ NIGHT

木住野佳子コンサート

実力派女性ジャズピアニスト、木住野佳子率いるピアノトリオの高知公演。
しっとりとした、大人のジャズを心ゆくまでお楽しみください。

木住野佳子 (p)
日景修 (b)
藤井学 (ds)

Opening act
マキコリカコ

2014年11月13日(木)
18:30 開場 19:00 開演

高知市文化プラザ
かるぼーと小ホール

一般前売り 3,500円 当日 4,000円
高校生以下前売り 2,000円 当日 2,500円

※ドリンクと軽食の販売いたします。

Music for
Understanding
the Soul
of International
Culture

主催「国際的な事業交流を中心に高知を楽しむプロジェクト」
公益財団法人高知市文化振興事業団